

平成18年度 研究論文

研究主題

子どもへの援助と教員評価へ活かす心理教育的アセスメントの一考察

つくば市立谷田部小学校教諭 寺田 英功

I はじめに

今日、学校や教育に関して見ると、いじめによる子どもの自殺、教職員の飲酒運転や酒気帯び運転、指導力不足教員の問題、子どもたちの規範意識や社会性の欠如、家庭や地域社会の教育力の低下など、教育に関する様々な問題が指摘され、教育への関心が高まっている。また、家庭で本来しつけるべきことに関して、学校や担任教師の責任であるがごとく、保護者から要望が出される例も多くなっている。教師の仕事は多様化し、多忙を極めている。そんな中、全ての子どもから、特別な援助ニーズをもつ子どもへの心理教育的援助サービスを行う、学校心理学が注目され、その学問や実践への期待が高まっている。

「学校心理学は、学校教育において一人ひとりの児童生徒が学習面、心理・社会面、進路面における課題への取り組みの課程で会う問題状況の解決を援助し、成長することを促進する心理教育的援助サービスの理論と実践を支える学問体系である。そして心理教育的援助サービスは、教師と学校心理学の専門家が保護者と連携して行うものである。心理教育的援助サービスには、全ての子どもを対象とする活動から、特別な援助ニーズをもつ子どもを対象とする活動までが含まれる。」と『学校心理士と学校心理学』の書にまとめられている。筆者は、数年前より継続研究してきた心理学的実践である「児童の実態調査とその結果を受けての個々の児童への個別指導や支援」「担任教師として、果たすべき児童の良き習慣づくりに対する指導と指導への自己評価」「児童相互の他者評価をもとにして作成した、被評価資料の活用による児童の自己理解の促進や、自己概念をより良く再構築させるための実践」を学校心理学の学問体系や特色、領域に照らし合わせて考察し、反省や改良、改善を主として吟味していく研修を進めてきた。そんな中で、学校という組織にとっても日々の原動力になり、課題の解決にもつながる学校心理学、そして学校心理士への期待は大きなものとなった。手始めに注目したのは、現場で比較的扱いやすく、学習指導や生徒指導上有効に活用できる、児童の生活面・学習面の重要な実態を把握できるアセスメントは作れないかということである。それが、個々の児童への早期指導援助に生かせるものになり、年々多忙の一途をたどる教職員の職務の一端を軽減できればと願っている。

また、キャリア教育や生徒指導上、自己理解を深めることは重要であり、筆者は他者に写った自己資料の作成をもとに、自己理解を深めるため実践を継続してきた。これに関しては、いじめ問題の加害者や被害者、猟奇的犯罪を起こす者、登校拒否に陥る者、フリーターやニートなど職を持たずに社会的に安定になる者等、現児童の段階で問題性を内在しているかもしれないと仮定するならば、個々の児童の性格・言動・価値観などの傾向、特徴などを、同年代の多くの子どもから、多くの視点・多様な感性による情報として早期に得ることは、問題性の早期理解、早期対応という点で大変意義深いと感じてきた。

学校心理学では、客観性の高いWISK-ⅢやK-ABC検査などの心理検査も熟練した学校心理士などがケースによって心理教育的アセスメントとして行う。しかし、本研究では、そこまでの専門性がなくても、実践可能なアセスメントの完成をねらっていきたい。多くの実践者が増えることで、関係諸氏の指導助言を得て、積み重ねられたデータから、学力向上への有効な手だて、深い児童理解から児童の生きる力を育み、学校教育がより充実できれば嬉しい限りである。そんな思い願いを抱きながら、初歩的な実践ではあるが、心理教育的アセスメント一端への足掛りを目指していききたい。

II 研究の目的

- 児童の基本的な生活・学習面の心理教育的アセスメント方法を検討し、同時にそれが教員評価（自己申告書）として生かせる方法を提示する。
- キャリア教育や自己実現上、重要な課題である自己理解を促すための、他者評価を心理教育的アセスメントとして生かす祭の集計処理の方法を提示する。

III 先行研究や文献的研究などから得られた実践研究への仮説（資料編 文献研究）

1 生活・学習面に関する心理教育的アセスメントについて

(1)心理教育的アセスメントの内容とその必要性について

担任教師にとって、年度当初の学級開きの時期に行う、児童の実態調査は大変重要である。家庭での生活習慣上の問題、朝食を摂らない、睡眠不足等は、学校での学習活動にも悪影響を及ぼす。また、学習習慣面で、家庭学習の未実施、学習用具の準備性のなさ等も問題性が継続されがちで、授業での基礎・基本となる学力の定着にマイナスとなる。

こうしたことから、児童の生活面・学習面について心理教育的アセスメントを行い、学校心理学の理論から重要項目の実態を把握し、個々の児童の課題に対し早期から指導援助を行うことは、大変意義があると考えられる。実態も知らず、対応もなしに準備を整えた工夫ある授業実践を行ったとしても、その効果は十分に期待されないであろう。

(2)心理教育的アセスメントと教員評価（自己申告書）について

心理教育的アセスメントとして、年度当初に採ったデータが、それ以降の指導援助により、どのように変容したか再度採って検討できることは「教員評価」に有効活用することができるであろう。テストの平均点、高得点をとる児童の増加数、読書量など、茨城県教育委員会が策定した「いばらきの未来を拓くたくましい人づくり」を基本テーマとする新しい教育計画「いばらき教育プラン」および茨城県の学校教育指導方針にも、教員評価の実施と共に目標の数値化について打ち出されている。例えば、ある教師は学力面だけに目を向け、テストの点数の変容しか教員評価として扱わないとすれば、児童にとって重要な生活面や生活習慣の改善はあまり期待できないと思われる。各教員の目標設定に対し、管理職かの事前の指導助言があるであろうが、子どもを伸ばす根っこの部分と考えられる健康面、生活面、学習面の充実から目を背けないことが大切であろう。児童に確かな学力を身につけさせ、かつ健康な心身を養うためには、習慣化を図るべき日常生活上の様々な課題がある。そして、その課題を理解した上で、個々の児童のニーズにあった課題への心理教育的援助サービスが必要となるのであり、担任として子どもと関わる1年の流れにおける、個々の児童の課題への指導援助と、児童の変容から得る結果、さらにそれに対する教員の自己評価は欠かすことができないと考えられる。

2 自己理解を促すための被評価（他者からの評価）に関する心理教育的アセスメントについて

(1) キャリア教育からの展望

平成18年度かの「新しいばらき教育プラン」では、『いばらきの未来を拓くたくましい人づくり』を掲げ、その第二番目に「生きる力をはぐくむ学校教育の充実」戦略がある。さらにその重点取組の二番目に『キャリア教育の充実』がある。

さらに、平成18年度の茨城県学校教育指導方針の中（P. 23）では、キャリア教育の充実として「1…人間としての在り方、生き方の指導の一層の充実」「2…学校の教育活動全体を通じて、児童生徒の発達段階に応じた小学校段階からの組織的・系統的なキャリア教育の推進」「3…進路に対する理解と協力を得るための保護者及び地域社会との連携」を努力事項としている。

本研究ではそうしたキャリア教育の重要性を踏まえ、キャリアカウンセリングからの展望で下記の②「自己理解を深めるための支援」を、3年生児童の発達段階からも必要であると考え、総合的な学習に組み入れ、実施することにした。

—— キャリアカウンセリングの内容（日本進路指導学会編，1996） ——

- ① 夢や希望を育て、将来への関心を高めるための支援
- ② 自己理解を深めるための支援
- ③ 将来への進路の情報を広げ、将来の進路への興味関心、理解を高める支援
- ④ 進路への不安や悩みを受け止め、進路選択や決定への支援
- ⑤ 追指導（再就職，離職，転職など）への支援

ここで、②「自己理解を深めるための支援」の一つの手だてとして、他者が自己の長所や、改善点をどのように評価しているか、これに関するデータを受けることが、自己理解上どのような意味を持つのかについて、人間関係の心理学に関する研修を通し、下記の原理・理論をまとめた。

帰属の共変原理

人が性格判断をする時は、相手の人（実体）判断する人々、時、状況の4つの条件を考えて行うものである。その際、以下の内容により説得力を持って判断する。

- ・ 弁別性…他の人と比較して、当人のみかどうかを見る。顕著かどうか？
- ・ 一貫性…いつもそうなのか、だれにでもそうなのか、どんな状況でもそうなのかという一貫性を見る。
- ・ 合意性…自分だけでなく、友人や仲間に聞いてもそうなのか、合意が得られるかを見る。

合意性については、児童が得た他者からの評価数が多ければ、自動的に認められる内容として誉めやすい。でも1つの内容でも重視し、誉める。

弁別性については、級友はもちろん、教師も保護者も認める内容であることを基本として捉える。他者と比較して、たとえ平均以下であると判断されても、個人内差における良さであれば誉め認めて、伸長のチャンスとなるようにする。

一貫性については、認められる内容は大いに認め、特に担任、児童、親が見て疑問の内

容である場合でも、認められた内容が、今後多くの場面で長所として発揮されるように、承認や励まし、助言などを継続する。さらに、認められた良さを発揮できるように動機付けを行継続し、自信を持たせることができるように支援・援助していく。

こうしたことを踏まえ、下記のように心理的な配慮のもとに助言や承認を行うことで、自己効力感・自己評価感を高めさせ、自己概念をより良いものにすることをねらう。

○長所について

→「君の良いところ、頑張っているところ…」を○○人もの人が認めてくれているね。これはすごいことだね。

→たった一つの長所であっても…、君の良さを見ていてくれる人がいたのは嬉しいことだね。先生（親）も…思うよ。これからもその良さを伸ばしていこうね。

→「道徳的価値に関する長所」奉仕・誠実・礼・社交性・思いやり・愛他性などは特に素晴らしい良さとして誉める。…こんな素晴らしい点を認められてすごいね。

→友達っていいね、君のいいところをちゃんと知っている…。

○改善点について

あくまでも、短所や欠点の指摘ではなく、「ここを直せばあなたはもっと良くなるよ…」 「ここを直せばもっと良い人よ…」として書かせたものなので、級友からの温かいメッセージであることを、十分理解させた上で、被評価内容を受け止めるよう指導助言を行う。

特に、人は自分の置かれている状況や、相手との関係性をたえず監視しながら人間関係を進めるという「セルフモニタリング理論」は重要だと考えられる。これは、他者の思いや、他者からの自己への評価のことも考えるといった、心に良いスイッチを育成する教育機能と解釈できるので、是非とも児童に養いたい。教育によって育まれた価値観や、他者（教師・級友・親）からの自己への評価内容を気にするようになり、自己の言動と比較するようになることは集団での生活では好ましい。これによって、自己言動に対する周囲からの被評価を予測するようになり、好ましくないことへの抑止力、自制心といった心が芽生えるであろう。逆に考えれば、こうした心が育っていない子は、やりたい放題、自分さえ良ければ他人はどうでもいい…等の問題行動に走る典型と言えるのではないだろうか。

いかにして、児童の改善点内容への改善意欲を高揚させるかは、その児童と教師、児童同士、親子の人間関係が大綱となる。この人の言葉なら…、この人に言われたら聞くしかない…、この人の言うことは信じられる…、この人に悪く見られたくない…、この人には嫌われたくない…、この人を裏切れない…こんな心理が児童を本気で改善させることにつながると考えられる。

IV 実践的研究

1 研究の方法

筆者の過去の心理教育的アセスメントに類する実践資料やその方法について、今後の課題とされた点を検討し、研究の目的にあった改善への試行、及び集計処理に関する時間の短縮案の検討等を行う。さらに、結果についての評価や結果の出力方法の改善を試みる。

(1)生活面・学習面に関する心理教育的アセスメントの作成

筆者が学級経営の一端として実施してきた、児童に対する日常の生活面・学習面に関するアンケート調査の見直しを行う。具体的には、回答のさせ方、回答内容の検討、質問事項の順序性の検討を行う。さらに、児童の長所や、課題がいかに変容したかを掴みやすくするために、回答を得点化する。これによってどのくらい生活面・学習面の伸びやつまづきが分かりやすくなったかを吟味する。さらに、それを教員評価（自己申告書）で活用することで、教員としての児童への対応に関する自己評価に役立つかどうかを検証する。

(2)教師による児童理解と児童自身が自己理解を深めるための心理教育的アセスメントの作成

自己概念をより良くするために、筆者が実施してきた他者評価の方法改善を図り、児童のお互いの評価のしやすさ、指導者側の評価内容の処理のしやすさを検討する。また、児童個々への級友からの評価を集約し、他者に写った自己としての資料を作成するが、この資料の作り方を検討する。特に、過去の実践では、他者評価を自由記述形式で児童に書かせ、それを分類してコンピュータに入力していたので、そのデータ処理にかなりの時間を有していた。いかにしてこの処理に関する時間を、短縮するかを試行錯誤し検討する。

2 実践研究の流れ（実践研究計画）

(1)生活面・学習面に関する心理教育的アセスメントについて

- ①質問紙の各内容に対し、回答を良いものから得点化して並べ替える。
- ②質問内容の善し悪しや、文章表現の善し悪しについて検討する。
- ③1回目の集計結果と、学級経営を進めた後に行う2回目の集計結果の比較の仕方を検討する。
- ④質問紙の回答の点数化が妥当であるかどうかを検討し、結果について解釈しやすいかどうかを吟味する。
- ⑤新しい生活面・学習面に関する心理教育的アセスメントを作成する。
- ⑥新しい心理教育的アセスメントの実施と結果の考察を行う。

(2)教師による児童理解と、児童が自己理解を客観的に深めるための心理教育的アセスメントについて

- ①他者を評価する方法として、過去実践した自由記述の課題点について確認する。
- ②他者評価に関して、マークシート形式など記入しやすく、かつ集計しやすい新しい調査方法の検討を行う。
- ③集計時間の短縮方法を検討する。さらに、児童に分かりやすい結果の出力方法についての検討を行う。
- ④新しい他者評価方法を実践し、その結果と考察を行う。

3 今年度の実践（対象－平成18年度つくば市立谷田部小学校3年1組児童34名）

(1)心理教育的アセスメント，かつ教員評価に活用するための生活アンケート調査の実施と見直し（資料－1，2）

今年度児童に実施した内容は，昨年度まで担当学年によって多少文章を分かりやすく変えるなどして使用していた下記の①から23の質問内容であった（平成18年4月11日実施）。

- ①朝自分で起きていますか？どちらかというと？
- ②学校へ来る前に、家でトイレ用をすませてきますか？
- ③朝歯をみがいていますか？
- ④昨日（きのう）のうちに学校へ行く用意をしておきますか？
- ⑤朝食を食べてきますか？
- ⑥あいさつはきちんとできていますか？
- ⑦チャイムのあいずなど時間が守れていますか？
- ⑧忘れ物がありますか？
- ⑨先生が話をしている時などにおしゃべりはありませんか？
- ⑩そうじを責任（せきにん）を持ってしっかりやっていますか？
- ⑪家で学習をがんばってやっていますか？
- ⑫休み時間や体育の時間に運動に自分から進んでとりくんでいますか？
- ⑬1日に勉強をやる時（塾・家庭教師を除く）どのくらいの時間やっていますか？
- ⑭勉強は自分からやっているかどうか？どちらかというとどれが近いでしょう？
- ⑮その日の授業内容を，家で復習（確認）していますか？
- ⑯家で，ふだん1日にテレビをどのくらい見えていますか？
- ⑰テレビゲーム（ゲームボーイ）などを1日にやる時間はどのくらいですか？
- ⑱家で何かきまったしごと（あまどしめ，ふろあらいなど）をしていますか？
- ⑲クラスのだれにでも公平（こうへい）にせっしていますか？
- ⑳困っている人を助けていますか？
- ㉑きまった人だけでなく，だれとでも協力して行動していますか？
- ㉒きいろいぼうしをかぶって登校していますか？
- ㉓なふだはついていますか？

今までは，選択する回答の文言を○で囲む方法をとっていた（資料1，2）。

2回目は各項目の内容により、「4 今のところ完璧」「3 たまにダメ」「2 半分くらい」「1 ほとんどだめ」など，児童が回答するであろうと思われる内容に望ましいものから順に高い数字をつけて分け，回答欄に数字を記入させる方法に改善点した。（資料3）。改善のねらいとして，表計算ソフトを利用し，児童の回答を数値入力することで集計作業が軽減できること，得点化しかつコンピュータで処理することで，グラフ化も素早く表現豊かに行え，結果の善し悪しや変容が捉えやすくなること，学校心理学で言う学校カウンセリングの日々の実践を継続した2学期に，児童の変容と教員評価に活用するための結果の比較が容易になることである。

児童の変容をつかむ意味と，教師の対応に対する教員評価に生かす意味で2回目のアセスメントを10月3日（3校時）に実施した。

(2)学習面を主とした心理教育的アセスメント（学習面評価テスト）の作成と実施

学習指導や児童の学力を定着させる、高めることは大変重要な教師の役目である。平成18年度の茨城県学校教育指導方針でも、教育課程及び学習指導の改善・充実の説明の中で確かな学力として基礎・基本を中心にその周りに「判断力」「思考力」「表現力」「課題発見能力」「問題解決能力」「学び方」「知識・理解」「学ぶ意欲」の八つが明記されている。それら重要な項目の力を高める上で、効果的かそうでないかの鍵となるものが、日々の学習面に関する個々の児童の実態ではないであろうか。学習に対する家庭や学校での準備性や態度、努力の実践状況を教師側が把握し、かつ個々の児童が自分の実態を客観的に理解することは、確かな学力をつける上で出発点となる重要なアセスメントになると考えた。さらに、そのアセスメントが点数化されており、多くの教師が活用しやすく、児童の状況がどうであるのかが分かりやすいものであればさらに良いわけである。

そこで、「学習面評価テスト」という名称をつけ、B4版の用紙左半分には、家庭での学習への準備性や学習実践の様子、保護者の協力度を答える内容を10の質問で50点満点になるように考案した。右側には、学校の授業中に絞って、児童がどのような状態であるかを問う10の質問を50点満点になるように考案した。集計がしやすいように、回答は全て得点になる数字で回答欄に記入するようにし、家庭での実態（H…home）と、学校での実態（S…school）をそれぞれ50点満点で合計する枠と家庭と学校の双方を合計（T…total）する得点枠を下部に設けた。これによって、教師が個々の児童の比較などをしやすいように、また家庭では頑張っているが学校では課題が多いとか、その逆であるなど個々の児童の個人内差が分かるように工夫した。

以下「学習面評価テスト」の質問ないようである（資料一4）。

★しつもんにあてはまる数字を四角の中に書きましょう。

家 庭 で の 実 態 H	①家でえんぴつ4本以上をとぎ、赤えんぴつなどじゅんびしてありますか？ ②きのうのうちに学校へ行く用意(教科書・ノートなど)をしておきますか？ ③朝食を食べてきますか？ ④忘れ物はありませんか？ ⑤がんばり表を毎日記入し、お家の人に見せていますか？ ⑥宿題をきちんとやってきますか？ ⑦家で家庭学習をがんばっていますか？ ⑧音読学習を、毎日がんばっていますか？ ⑨その日に学校で勉強したことを、家で見直ししていますか？ ⑩おうちの人、家庭学習や宿題、がんばり表を見てサインくれますか？
学 校 で の 実 態 S	⑪先生が話をしている時などにおしゃべりはありますか？ ⑫授業中、先生や人の話をよく聞いていますか？ ⑬授業中消しゴムなどであそんだりしていませんか？ ⑭1時間の授業で、どのくらい身に付いていると思いますか？ ⑮発表はできていますか？ ⑯分からないことやしつもんしたいことを聞いていますか？ ⑰授業は、いつも楽しくがんばられていますか？ ⑱グループ学習では、友達と協力して、話し合うことができていますか？ ⑳自分の授業への集中力に点数をつけると？

回答に関しては、例えば「①⑨グループ学習では、友達と協力して、話し合うことができますか？」に関しては、「5 よくできている」「4 ほぼよくできている」「2 あまりよくできていない」「0 話し合うことができない」や、「②⑩自分の授業への集中力に点数をつけると？」に関しては「5 100点」「4 80点」「3 60点」「2 40点」「0 努力がひつよう」のように、その回答の実態の重みなどを考えて、5点満点で何点ぐらいが妥当であるかを考えて設定した。

(3)自己理解を客観的に深めるための心理教育的アセスメントの実践について

①過去の他者評価の実践方法と課題点

今までの他者評価を行わせる実践では、クラス児童名が名前の順で半分ずつ印刷された2枚の用紙を配付し、それぞれ仕切られた級友の名前の枠内に、その人の長所・頑張っているところ、ここを直すともっと良いという改善点を自由に記述させる方法で他者評価を行わせてきた。この方法であると、クラス児童がお互いに自由記述で自分以外の全員を評価した内容を、コンピュータの表計算ソフトに入力する作業に時間がかかった。さらに、その内容を、過去の筆者の研究実践「意味分類を得るための記述分類実験」の結果（資料-5）に当てはめていく処理にも時間がかかることが大きな改善課題であった。

②マークシートの他者評価の試行（対象…つくば市立谷田部小学校3年1組 34人 平成18年7月11日 2校時実施）

まず、準備として、昨年度に実施した他者評価の内容を大きく「学習面に関すること」「性格・人柄・行動面」「役割・やるべきこと・人との関わり」の3つに分け、それら3つをさらに左側に長所内容と、右側に改善点内容と二分した。さらに、各内容に「ひょうかばんごう」として、0から99の番号を割り付け、合計100項目の「他者評価内容一覧表」としてまとめた（資料-6）。

次に、他者評価の記述を軽減する目的で、マークシートの資料の作成を試みた。これは、B4版縦の用紙の上段に級友の名前を、名前の順に列挙し、その下に評価項目の割り付け番号0から56を1枚目に、57から99を2枚目にまとめたもので、これをクラス児童の人数分印刷した（資料-7, 8）。

しかし、いざマークシートの資料で、児童に他者評価を実施させてみると、細かい数字が並ぶ上、人名と評価内容を縦横に見ていくだけで疲れるとの声が上がりに、児童から辛いという訴えも2, 3出たので使用を断念した。

③数字記述による他者評価の試行（対象…つくば市立谷田部小学校3年1組 平成18年7月13, 14日 2校時, 3校時実施）

他者評価をクラス児童相互に行わせるに当たり、自由記述では過去の実践からも児童の記述と、教師のデータ入力の処理に時間が大幅にかかること、マークシート形式では該当項目の数字に○をつけるのは楽なようでも、細かい数字で児童の目がくらみ、評価継続が困難なこと。こうした壁に当たり、クラス児童とどんな方法が簡単に友達への評価がしやすいか相談した。その結果、児童からは各児童名の枠の中に、「ひょうかばんごう」を記

述していくのが簡単であるという意見を得た。そこで、B4版横の1枚の用紙を縦5，横7の枠（計35）に区切り，その上段に児童名を入れた記述用紙を作成した。各児童の枠は上部の面積を広くとり，良いところに関する「ひょうかばんごう」を記述させ，下段の面積は狭くして改善点の「ひょうかばんごう」を記述させることにした（資料一9，10）。

④児童への結果の提示方法について

過去の筆者の研究実践では，クラス児童全員の他者評価への自由記述内容を，表計算ソフトに入力し，その後対象児ごとにデータをソートして，個々の児童へ「被評価」として出力した。長所内容と改善点内容は左の列と右の列というように別々に出力したが，被評価として同一内容がある場合は，縦（横書き）に連続で列挙された。

今回の実践では，表計算上で，個々の児童の各「ひょうかばんごう」数をカウントさせる関数を用いて集計し，それを棒グラフで表わすことにした（資料一11，12，13）。

⑤被評価から自己理解を促すための児童へのプリントの作成について

総合的な学習として「自分についての理解を深めよう」というプリントを作成し，児童に配付した。自分では気付かず，他者によって気づかされた長所や改善点といった盲点領域の重要性を意識させる意味で，ジョハリの窓（Luft, J. & Ingham, H.1955）の資料を掲載し，事前に説明した。そしてプリントは下記の順番に記述するように編成した。

- ・開放領域…自分も友達も知っていた自分の長所，改善点。
- ・隠蔽領域…友達は知らないが，自分だけが知っている自分の長所，改善点。
- ・盲点領域…自分は知らなかったが，友達は知っていた自分の長所，改善点。

未知の領域は書きようがないので，最後にはまとめとして，今後頑張って伸ばしていきたい長所内容，今後直していきたい改善点について記述するようにした（資料一14，15）。

V 結果と考察

ここでは，研究のねらいに即して，心理教育的アセスメントの結果とその考察を主として扱い，心理教育的援助サービスに関わる実践については，学校長に提出した自己申告書の学習指導と学級経営及びその他の指導に記述した内容のみとし，詳しい説明等は省く。

1 心理教育的アセスメント，かつ教員評価に活用するための生活アンケート調査の実施と見直し

(1)生活アンケート調査の点数化による活用について

生活面や学習面など，児童に自己の実態を理解させ，それを元により良い課題を持たせ，課題の達成を図っていくことに関して，それぞれの内容を点数化することにより，担任教師としても大変児童の実態を捉えやすくなった。また，4月11日に実施したアセスメントを，後に改良した点数化した各項目の数値に当てはめて集計し直した（資料一16）。その結果，10月3日に実施したアセスメントの点数（資料一17）と，表計算上で簡単に差を求めることができ，変容を捉えることができた。

さらに，質問紙で行ったこのアセスメントの項目のうち，家庭での生活習慣に関する内

容、生活面、学習面、健康面の四つに分類し（資料一17、右側の記号）、1回目と2回目の差を集計し（資料一18）、棒グラフで表わした（資料一19）。

このような活用の仕方により、個々の児童の伸びている部分やつまずきの部分が見えやすく、個々の児童に対して、指導者である担任教師の力を発揮できた点、さらに努力を要する点などが捉えやすくなった。

(2) 教員評価への活用について

以下、筆者の学校長へ提出した教員評価の自己申告内容とその結果を考察する。

<その1>

● 学習指導【今年度の具体的な目標・目標達成のための具体的な手段】

○ 目標 ① 授業への集中力を高める。

② 家庭学習の習慣化を図る。

数値目標＝学級実態調査学習面 5項目の中で各自2ポイントアップ

○ 具体的な手段

① 毎時、ねらいの把握と学習への集中を促すために、導入時の板書（クイズ）、話（実生活と関連する話題や興味を引く事例の紹介など）で注視させる工夫、学習の意義や活用面の解説等を工夫し、学習意欲の高揚と集中力の持続を図る。

② 学年統一で実施する、生活・学習・ドリルががんばり表を活用し、児童↔保護者↔担任と毎日やりとりし、児童の生活・学習面の実態を担任と保護者共に理解し、保護者と連携した指導援助ができるようにする（資料一22、23）。

● 学級経営及びその他の指導【今年度の具体的な目標・目標達成のための具体的な手段】

○ 目標 生徒指導の機能として、児童の心理的な安定を図り、学校生活を楽しく充実したものにさせる。

① 児童に愛されている実感を保障していく。

② 自己の有能性（役に立つ・得意がある・頑張っている等）を定期的の実感させていく。

数値目標＝学級実態調査生活面（4、10月に実施）13項目中で各自4ポイントアップ

○ 具体的な手段

① 児童とのふれ合い、交流を密にし、児童理解を深める。また、グループ学習・遊び方を指導し、教師と児童、児童相互の人間関係をより良いものに築く。

② 担任から児童へは承認・褒め励ましを基本とする（最低週1回は班ごとに計画的に声をかける）。また、児童に個人差を理解させ、結果重視に偏らず努力の過程も互いに好評価し合える価値観・雰囲気作りに努め、生活面・学習面・人柄などで長所を認め合えるように指導・援助をしていく。

<その2>

● 学習指導【進捗状況及び課題等】

・ 学習の躰強化、がんばり表（音読、漢字・計算ドリル、自主学習、生活面）を毎日提出（保護者との連携…サイン）させ、チェックと指導助言を継続した。

- ・学習への外発的・内発的動機付けを図る。←関連知識・現象などからクイズによる導入や途中解説，途中発問（クイズ）の頻繁な実施。
- ・前時の学習の復習（約3～5分）の実施（暗記・定着・理解）。
- ・授業の工夫（課題設定の仕方，学習の進め方の変化，グルーピングの規模（個人→大集団），コミュニケーションの在り方等を児童の実態や単元等を考慮し，工夫実践した）。
- ・個人差に応じたスモールステップ学習←段階的目標の設定と具体的学習方法の明確化に努め，達成感を味わわせた。

○結果として，目標の『2』アップに対し『3』ポイント増加し，目標の達成が果たせた。

【自己目標の変更・追加内容】

（資料-17）

実態調査で見る個々の児童の伸びも，行き詰まりを見せるとなれば，後期の比較・伸びを見る方法を今後の課題としたい。

【進捗状況及び課題等】

- ・今年度の学校経営方針，月ごとの学校経営方針，月ごとの生徒指導，保健指導を分かりやすく具体的に児童に説明，指導。
- ・日常の心理教育的援助サービス（学校心理学で言う学校カウンセリング）の実践。
- ・児童理解のための児童相互の他者評価の実施（2学期総合で活用）。
- ・DESC法によるアサーション（対人スキル）の学習とトラブルに対する平和的解決実践への継続的指導，働きかけ（研究授業）。
- ・「学校目標」「学級目標」「日常五心」の朝の会での斉唱による意識化，道徳指導，チャンス指導による礼儀，思いやり，常識的指導等の徹底。
- ・グループ学習時，給食時，清掃活動時のふれ合いと集団指導（マナー・思いやり・協力・リーダー性・学び合い・話し合い・PM機能等）。

○クラス，学校，担任，授業の分かりやすさ，授業の工夫，生活指導，集団づくりへの評価は，「特によい」「よい」「ふつう」の評価が大変多く，好結果を得た。

（資料-20，21）。

○厳しさとユーモア，暖かさを柱に経営，温かい助言も多用し，褒める指導，児童同士認め合う場の設定など工夫実践した。

○13項目中で合計の平均値で『4』ポイント→『3.8』ポイントの増加で，個々のポイント増加平均数は『5.7』と良好（資料-17）。

【自己目標の変更・追加内容】ポイント数後期にかけてさらに+『1』へ

以上のように，心理教育的アセスメントとして，児童の日常の生活面・学習面の伸びを支える根拠と言える部分の実態を捉え（資料-24，25，26，27），家庭学習の実践や生活面の充実度への点検と児童への励ましを，保護者の協力を交えながら心理教育的援助サービスの一端として実践してきた。学級集団全体の伸びはもちろん，個々の児童のいろいろな成長もあり，本研究の紙面では触れなかったが，学校評価として3年1組の保護者が，学校や担任教師に対して下した評価は高いものであった。担任として4月からの学級経営を振り返っても，単なるテストの点数に表れるもの，表れないものといろいろある。しかし，毎日家庭学習として，音読，漢字ドリル，計算ドリル，自主学習を実践するようになり，保護者にサインをもらってくる児童の確実なる増加。朝食を食べてくるようになった

児童の増加は大変嬉しいものである。

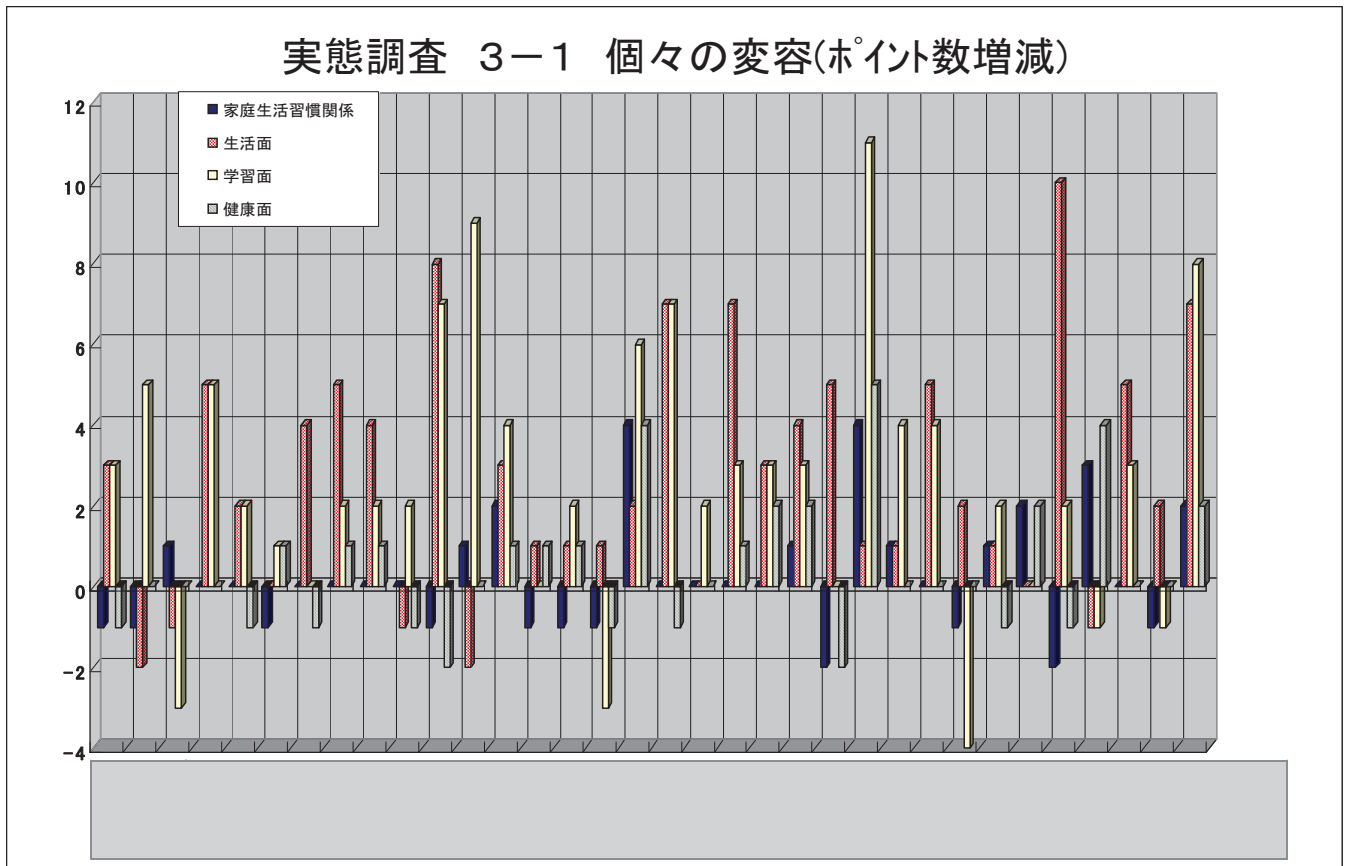


図-1

児童への1回目、2回目と心理教育的アセスメントを実施し、その差を伸びた面は上へ、悪くなってしまったものは下へ伸びるグラフに表わした図-1を見ても、明らかに伸びている児童が多く承認しやすい。そして、課題が増えた児童とその内容も把握しやすい。

このように、グラフの表し方にもよるが、家庭生活習慣、学校での生活面、学習面、健康面などの増減も捉えやすく、どの児童には、どの部分を褒め認めてやれば良いのか、どの部分を指導援助していけばいいのかが分かりやすい。これは、評価と指導が一体となった実践の一例とは言えまいか。

(2) 教師による児童理解と、児童が自己理解を客観的に深めるための心理教育的アセスメントについて

今回の実践では、まず他者評価のさせ方で苦慮したが、3年児童との相談から児童自身がやりやすい手だてを提示してくれるなど、とても助けられた感が強い。他者評価を数字で記入させた分、児童の処理が早かったことと、教師側のコンピュータへの入力、処理が早かった点は大きな進歩であった。さらに、被評価（他者に写った自己）を関数を使って楽に集計し、その結果をグラフとして出力したことに、分かりやすいという保護者の評価も得られた（資料-11, 12）。

さらに、グラフ化する際に、長所はその児童の一番カウント数が多かった項目に合わせて最大値が決るようにし、改善点の方は筆者で最大値30と工夫して設定した。その結果、長所の最大評価を受けた項目のグラフの長さは、たとえ少ない数でも改善点に比べて長く、

改善点の方は，ある程度何人もから指摘を受けたにせよ，グラフの長さは30分のいくつかになっている。一見して誰もが自己の長所の多さにすぐ目が向くなど，過去の被評価の資料より見やすく，心理的に受け入れやすいものになったと考えられた（資料－28，29）。

VI まとめと今後の課題

学校心理学の研修から，多くのヒントを得て，過去の筆者の実践の改善や発展が進められ，本年度は心理教育的アセスメントに絞っての考察ができた。まだまだ，質問紙を使ってのアセスメントとして，内容項目の検討や，アセスメントの実施結果と関連する児童の良さや改善点について追求し，アセスメントから見えてくるものを明らかにしなければならない。また，心理教育的アセスメントは，その後の心理教育的援助サービスへのステップであることから，その部分へのつながりを絶えず関連づけていく研究を今後は進めたいと考えている。